

アルマダ戦争と英国政府の態度

浅田実

【要約】 一六世紀英国史研究がいかにも股賑をきわめたかは人も知るところである。農村毛織物工業の成長、ジェントリーの興隆、そしてまたかすかすのエリザベス治世に対する評価と、いろいろな角度からする研究がこれまでなされてきた。しかし、アルマダ戦争については正面からこれを取上げる試みはまだなされていない。ここでこの問題をとりあげるのは、英国の大をなざしめた要因は、国内の社会構造の分析を通じてえられることはもちろんであるにしても、複雑な国際環境のなから身をおこしていったという英国史の他の一面もまた見過ごされてはならないと考えたからである。中世の英国が大陸の一員であったことはいうまでもないが、その後といえども英国は大陸諸国と離れがたい関係をもちつづけていたはずである。本稿は、この戦争に際しての英国政府の対策を検討することを通じて、一六世紀という時代の制約を免れがたかった当時の英国の姿を解明したものである。

史料 五〇巻三号 一九六七年五月

はじめに

「海上を支配するものは貿易をおさえ、世界の貿易をにぎったものは、世界の富と世界そのものをにぎる」^①とサー・ウォルター・ローリーは述べている。英国の海外発展、貿易圏の拡大は、一五五〇年代はじめのアントワープ貿易（毛織物輸出）の危機の時代に積極的になったといわれている。^② たしかにこのころから、ロンドン商人の海外探検・新貿易路開拓のための投資ははじまり、

イーストランド会社やレヴァント会社が設立される一五七〇年代以後になると海外探検・貿易圏拡大熱はブームに達し、一六〇〇年の東インド会社設立、一六〇六年のヴァージニア植民会社の結成へとつながっていく。^③ 国内生産では農業が主であり、人口の大部分は農民であったとはいえ、商業なり、造船業なり、製造業なりが、農業に代る将来の黄金郷であるという確信を、当時の人々はいよいよやくいだきはじめていた。これらのことについては、重商主義政策をめぐるジュラルド・マリーンズとトーマス・マンとの

論争(一七世はじめ)の紹介など、多くの研究が、これまでわが国でもなされてきた。^④ また当時の毛織物生産の構造やその輸出を中心とした経済的發展の問題についても、あまたの研究をみることができる。^⑤

しかしながら、以上のような植民運動や海外發展の黎明期の問題を考えるにあたって、考慮の外におくことのできない対外戦争とか外交の問題については、これまでとかく等閑に付されがちであった。概説書さえもが大書している「アルマダの海戦」についても、とくにまとまった研究はまだだされていない。ここでこの問題をとりあげるのは、もとよりそうした実状をなんとか打開したいとの考えからであるが、同時にまた、近代化への第一歩を踏みだしつつあった当時の英国がこの戦争を通じてなにを学び、後の歴史になにを遺したかを明らかにすることが、英国史なり英国の理解に資するところがあるろうと考えたからである。

それなくしては、後の大帝國は形成されなかったと考えられる点で、エリザベス朝の海外發展、スペインとの衝突、そしてその勝利の意義はきわめて大きいのはいうまでもないことだが、しかし、当時ヨーロッパ最強の軍勢力を誇ったスペインとの闘争は、まさに英国の死活を占う重要事であった点を、われわれは軽視してはならないであろう。国家の独立あつての経済力の充実に

あり、國富なり民富の向上であつたはずだからである。

① W. Raleigh, A Discourse of the Invention of Ships, *The Works of Sir Walter Raleigh*, 1829, ed. vol. VIII, p. 325.

② エントンのらわゆる「ロンドン・マントワーン船軸」London-Antwerp axis が一五五〇年ごろからくすれていった点についてはすでに多くの先学の注目をあつめてゐるフィッシャー教授の論文 F. J. Fisher, *Commercial Trends and Policy in Sixteenth Century England*, *Ec. H. R.* vol. 10, 1939-40. エンゴのロンドン港毛織物輸出統計が雄弁なものがたつてゐる。なお、越智武臣『近代英國の起源』昭四一・一九七二〇九頁。角山榮『イギリス絶対主義の構造』昭三三・四三頁以下。同『イギリス毛織物工業史論』昭三五・一四五頁以下参照。

ジョン・セムステアマン・カボット父子以来英國の冒險的探検は試みられてはこた (J. A. Williamson, *Maritime Enterprise 1485-1558*, 1913, p. 104 f.) が、ロンドン商人らがこれを積極的に支援するのは、この不況を契機としてであり、これによつて、冒險や探検はたんねんからちやわぎではなくなつた。cf. G. D. Ramsay, *English Overseas Trade during the Centuries of Emergence*, 1957, pp. 25-30.

③ Ramsay, *op. cit.*, pp. 40-41, 67, 109. なお、ウイリアムソンは一五七〇年代を Fertile Seventies と称して、英國の對外發展の一画期とみなしており、貿易も伸張した、と述べてゐる。J. A. Williamson, *The Tudor Age*, 1953, p. 319 f. また、レノックス会社の設立については、A. C. Wood, *A History of The Lennox Company*, 1935, pp. 10-11. ノースランド会社については、M. Sellers, ed., *Acts and Ordinances of the Eastland Company*, 1913, pp. 33-36. 東インド会社については、H. Stevens, *The Dawn of British Trade to the East*

- ④ 堀江一河野訳『トーマス・マン重商主義論』二三八―二三九頁、昭
一七、張漢裕『イギリス重商主義研究』一六八、一八四―一八六頁、
昭二九。

⑤ 代表的なものとして、大塚久雄『欧州経済史序説』昭一七、角山、
前掲書、船山栄一「資本主義発達の起点」、山之内靖「國民的産業と
資本主義の展開」(『西洋経済史講座』Ⅱ、昭三五) など。

一 アルマダの海戦

メアリー・テューダー時代に対する反動的要素があったとはい
え、エリザベス一世治世の当初一〇年ぐらひは、英国のスペイン
との関係はおおむね良好であったといわれる。それはフランスと
ハプスブルク・スペインとの拮抗という当時ヨーロッパの国際環
境のなかで、英国にとってはフランスが従来の仇敵であったから
である。サー・ウィリアム・ホーキンスのギニア・西インド密貿易
もメアリー時代からひきつづき黙認されていた。しかし、一五
六九年、ホーキンスがメキシコのサン・ファン・ダ・オローアで
スペイン総督と衝突したところから、英西間の友好は疑わしいもの
となった。その後、西インド海域はもとより、セビリヤでもスベ
インの異端審問は強化され、英国内ではそれに対抗的なカルヴイ
ニストが勢力を伸ばすことになる。^②

それとともに西インド海域では英国側の報復的な私拿捕が横行

することになるが、このころから勇名を馳せはじめるのがサー・
フランシス・ドレイクであった。^③そしてまだ若い船長であったド
レイクに名をなざしめた世界周航が試みられたのは一五七七年の
ことであった。この航海は、レスタター伯、ウォルシンガム卿、ハ
ットン伯、ホーキンス卿(当時海軍長官)、エリザベス女王個人
をも出資者とするなかば公然たる国家的事業であった。それはそ
のころ盛んに行われていた西部地方諸港の商人達が支援した小規
模な拿捕とは様子の異なるものであった。しかもこの航海の成功
は、英国の東インド貿易へのはじめての足がかりとなったもので
あるばかりでなく、王室に莫大な予算外利得をもたらしたもので
あった。^④

ドレイクがプリマス港に帰還した一五八〇年にスペインはボル
トガルを併合し、東洋の富をも独占して、第一級の海軍国として
の名をほしいままにすることとなった。これに対抗して英国内では、
もとポルトガル領であったアゾレス諸島をフランス新教徒と
協力して占領しようという計画が熱心に練られ、なかにはこの機
会に、東洋ルートの一つであるマジニラン海峡を掌握せよと主張
するものさえあった。時を同じくして、サー・ハンフリー・ギル
バートやローリーが北米探検に着手しはじめる。一五七八年、七
九年のギルバートらの探検そのものは予期した成果を収めえな

ったが、これが契機となって新大陸に関するパンフレット、書物などがぞくぞくと世にだされ、東洋航路に対するものとして「西方植民」がジョン・ディーヤリチャード・ハクルートらによって強く主張されるようになった。^⑤

英国内はまさに海外発展の意欲に充ち溢れていたのである。そして、スペイン世界帝国にあえて挑戦していこうとする英国航海者の意気は、一五八五年英西間の戦闘が正式に開始されたときのドレイクらの活動に示される。この年、穀物不足に悩むスペイン諸港に荷付けした英国船多数が、フェリペ二世の出入港禁止令で拘留され、積荷は押収された。これが契機となって、英西間の戦闘は公然としたものとなった。すくなくとも英国側ではそうみている。英国側ではただちにスペインならびにその同盟者に対する「報復拿捕認可状」(letters of reprisal) が交付されて、私拿捕は国家目的に公然奉仕するものとなった。^⑥ パーナード・ドレイクは同年六月ニューファウンドランド近海にスペイン漁船団を掃蕩するよう命ぜられ、フランシス・ドレイクもまた副司令官として、スペイン植民勢力の中心地である西インド攻撃を命ぜられた。このとき、フランシス・ドレイクはスペイン・西インド植民地の主要拠点であったサン・ドミンゴ San Domingo とカルタヘナ Cartagena を攻撃し、とくにカルタヘナでは夜襲をかけて住民

スペイン植民者を劫掠したのち、一時はこれを占領したという。^⑦

この戦によってあきらかになったことは、スペイン・西インド植民地の防禦がはなはだ心許ないということであった。そこでスペインはその対策として、要塞の構築、守備隊と船舶の増援とをはかることになった。それとともにフェリペ二世は海軍提督サンタ・クルス伯と、英国本土攻撃計画を最終的に検討しはじめた。サンタ・クルス伯はこのとき、船舶七七、〇〇〇トン、海軍三〇、〇〇〇、陸軍六〇、〇〇〇を要請している。これはまず英海軍を海上で完全に粉砕し、その後英本土に侵入すべきだという考えからでたものであったが、それは当時スペインの財政をもつても、とうてい調達しえないものであった。フェリペ王はより現実的な案として、英海軍をくいとめ、ネーデルランド進駐中のパルマ軍を英本国に上陸させるという解決策を示して、サンタ・クルスに了承させた。^⑧

こうして、スペイン・アルマダの集結準備がはじまった。リスボンにはギャレオン船が集められ、要塞の構築がすすめられた。一五八七年ようやく英国側ではドレイクのリスボン遠征を許可した。満をじて待機中のドレイクはプリマス港から勇躍してリスボンにむかった。このとき、ドレイクには、港外にあってアルマダの集結を妨害する指令だけがだされていたのであって、港を攻

撃する権能は与えられていなかった。しかし、ドレイクはリスボン港内襲撃こそしなかったが、第二の集結地であるカデイスの情報を手にして急行し、カデイス港守備船隊を冒して港内の船舶を破壊した。さらに帰路アゾレス諸島沖にまわって、スペイン大キヤラック船サン・フェリペ号を拿捕した。奢侈品を満載したこの船の捕獲は、この時のカデイス遠征費の二倍以上の収益をもたらしたといわれ、世界の王者フェリペ二世の髭を焦すものであったといわれる。^⑨

一五八八年七月、戦艦二三〇隻、乗船兵士一九、〇〇〇、海軍八三五〇、ギャレー船奴隸二〇八〇、砲二六三〇をもったスペイン・アルマダ艦隊が、ラ・コルーニャを出航して北上してくるのは、こうした経緯のなかにおいてであった。さいわい、アルマダ船隊は敵船に接舷できず、有効な打撃を加えることができないまま、風と潮に流されてつぎつぎに戦力を喪い、乗員も氣力をくじかれて、ドーヴァー水路を通過していった。さいわいにして、アルマダはカレレーに到着できず、バルマ軍との合体も成功しないままに、北海方面に撃退された。しかし七月二日から七月二十九日におよんだ四度にわたる英国海峡での海戦は、英国の朝野をまさに震撼させるものがあった。^⑩アルマダ侵寇に備えて、ドレイクは同年四月から女王のギャレオン船五隻と西部地方の商人船五〇隻

をもって待機を命ぜられ、サー・リチャード・グレンヴィルのヴァージニア遠征船も足止めされて、これに加わった。陸上ではドレイ伯、ジョン・ノリス卿、リチャード・ビンガム卿麾下の軍が沿岸地帯に配備され、いつでも州境を越えて援軍をおくれる体制が整えられた。^⑪ティルベリー（テムズ川河口）では、レスター指揮下に二万の兵がバルマの上陸に備えて配された。一軍はまた女王の身辺護衛のため臨戦体制を整えた。これら待機中の兵士に対する食糧調達は守備隊司令部を悩ました。プリマス周辺の農村では兵士の糧食が強制徴発された。この方面西部地方でかき集められたビールはとくに酸っぱく、^⑫兵士は病氣になった。こんな有様であったから、スペイン・アルマダを迎えての海軍長官ハワードの憂慮はなみなみならぬものであった。^⑬戦おわって間もなく、ハワードは次のように書き記している。「こんな戦争はこれまでどこにもみられなかった。レバントで戦った経験のあるスペイン人も『今回の四度にわたる交戦、なかでもとくに壮烈をきわめた七月二八日の戦（カレレー沖＝引用者）は、あの時（レバント＝引用者）をはるかにしのぐものである』といている。今度の戦闘では、彼らがあつた時に装填した砲弾の約二〇倍を準備した、ともいっている。……神の御恵みだ、ああ救っていただいたのだ^⑭」。そこには勝利感とてみじんもなく、ただかろうじて救われたという感慨

がのこっていただけであった。もはや火薬も弾薬もつき果てていた。戦い終って帰還した船員の間にも壊血病やチフスが横行したし、死者も後を絶たなかった。まさに国をあげての非常事態であった。

ともあれ、危機は免かれた。しかしアルマダの撃破は英国を安泰にしなかった。交戦は続けられ、一五九六年には第二回のアルマダ侵寇が、さらに一五九七年には第三次の攻撃が試みられ、一五九九年にはフェリム三世のもとで、もう一度攻撃の計画がたてられた。そして、ようやく平和がもたらされるのは、ジェームズ一世登極後の一六〇四年のことであった。^⑥

- ① J. A. Williamson, p. 248. 後述第三節註⑤参照。
- ② *ibid.*, pp. 299-301.
- ③ J. A. Williamson, *Sir Francis Drake*, p. 31. 史書として、I. A. Wright, *Documents Concerning English Voyages to the Spanish Main, 1569-80* (Hakluyt Soc.).
- ④ この航海の詳細については R. Hakluyt, *The Principal Navigations* (Everyman's ed.) vol. VIII, pp. 48-87.
- ⑤ フランシス諸島占領の計画は、ホルタガル王位要求者フアン・アントニオ Don Antonio を擁立して行われたものだが、一五八三年チルセイラ島 Terceira 沖の海戦でスペイン艦隊に敗れた。英国ではその後、フアン・アントニオの計画に熱意を示した。cf. J. A. Williamson, *The Tudor Age*, p. 348. この付近は東西両ヘム球の間にあり、極めて重要な地理的位置であった。J. H. Parry, *Europe*

and a Wider World 1415-1715, p. 46.

また、当時マシエロン海峡占領を主張したのは、他ならぬ不朽の航海・探検の記録をのこした Richard Hakluyt (1553-1616) であった。ドレイクが海外探検航海実践の第一人者であったとすれば、ハックルトはいわばそのスポークスマンで、盛んに新大陸植民を説いた。
— E. G. R. Talor, *Writings and Correspondence of the Two Richard Hakluyts* (Hakluyts Soc.), I, p. 139.

⑥ 戦争は一五八五年五月に開始されたことが、いわゆる宣戦の布告はなかった。エリザベスはただハンプスブルクの超国家主義「フエリヤ二世の世界主義に遺憾の意を示した」として、*of a Declaration of the Causes moving the Queen of England to give Aid to the Defence of the People afflicted and oppressed in the Low Countries*, 1585, II. 報復拿捕の認可については K. R. Andrews, *Elizabethan Privateering*, 1964, pp. 22-24. 拙稿「エリザベス朝ロンドン商人と私拿捕業」『桃山歴史地理』(大寺)参照。

- ⑦ I. A. Wright, *Further English Voyages to Spanish America 1583-1594* (Hakluyts Soc.), p. 36, p. 44.
- ⑧ The Correspondence between Philip and Santa Cruz, C. F. Duro, *La armada invencible*, I, p. 214 f.
- ⑨ フエリヤ二世は「この世にフアン・フエリヤ号を失ったことをとく悲しむ」と述べた。V. Fernandez Asis, *Epistolario de Felipe II sobre asuntos de mar*, pp. 162-3. (A. L. Rowse, *The Expansion of Elizabethan England*) pp. 264-265.
- ⑩ アルマダ艦隊のこの数字は、当時の古物研究家ウィリアム・キートン (W. Camden 1515-1623) の記録による。W. Camden, *History* (1675, ed.) p. 407.
- ⑪ Rowse, *op. cit.*, pp. 273-281.

⑫ 当時英国にはまだ常備軍としてなく、軍事勤務は州の徴募によったから、軍はみな州単位で組織されていた。したがって州境を越えての勤務こう計画はきわめて思ひきつたものであった。C. G. Cruickshank, *Elizabeth's Army*, p. 6. ちなみに、州単位を越えた軍が組織されるのは、ビュエリタン革命の際のクロムエルのニュー・モデル・アーミーが最初であった。——浜林正夫『イギリス市民革命史』一三二、一四一—一四六頁。

⑬ 当時英国のビールが酸っぱかったのは、製造技術がきわめて未熟であったことによる。——拙稿「エリザベス朝英国の砂糖」(『風俗』五卷三号)。

⑭ Rowse, *op. cit.*, p. 270.

⑮ J. K. Laughton, *The Defeat of the Spanish Armada*, vol. II, pp. 40, 55.

⑯ S. R. Gardiner, *History of England from the Accession of James I to the Outbreak of the Civil War*, vol. I, p. 207 f.

二 国家財政と海軍力

以上のようにみてくると、アルマダ海戦に象徴される一五八五年から一六〇四年の英西戦争は、遠征と探検そして私拿捕業——スペイン海上帝国に対する挑戦——によって惹起されたものと考えることができる。それは当時の国際情勢からいって、英国商人やジェントリーが当然行わざるを得なかった富獲得の手段であったともいいえよう。実際この戦争中に私拿捕業者はさらに大きく翼を伸ばし、一七世紀の大洋航海、貿易への足がかりをつくった

ことは確かである。しかしながら、戦時中の拿捕は一つの戦闘行為として当然であるとしても、戦前からのホーキンス、ギルバート、ドレイタらの私拿捕——いわば暴力的富の獲得——が、大陸とくにスペインとの政治的紛争を昂進させ、全面戦争への誘引となつたのだとすれば、それが当然のことながら英国毛織物輸出貿易の最重要市場(ネーデルランドとスペイン)を失わせるものであったという点で、重商主義的な政策を重要な課題としていた当時の英政府としては、これらの行為を容認することは、まさに愚策であつたというのほかないのである。G・アンウィンもいうように「私拿捕業は貿易に対する明確な阻止的行為であるのみでなく、……貿易と産業におそるべき危機の時期をもたらしたものであったからである。」

ところで、海上権の掌握こそ国運を拓くもとと考えたサー・ウォルター・ローリーは、対スペイン戦争の際のエリザベス女王政府の決断力にぶさを批判して、つぎのようにのべている。「故女王は、文人を信頼したと同じくらいに武人をも重視していれば、わが国はあの大帝国をすたずに打ちのめし、彼らの王を昔の無花果とオレンジの王にしたことであろう。だが陛下は、中途半端な小規模な攻撃によって、スペイン人に守備を固めさせ、それまで気付いていなかった弱点を教えることになつただけである」と。

私拿捕の結果した功罪はしばらくおくとしても、とにかく海上への力強いエネルギーに充ち溢れていた時期に、なぜもっと徹底的にスペイン海上勢力を打倒し、積極的に海上へ向かう国民のエネルギーを結集しなかったか。とくにアルマダ勝利直後の一五八八年秋から一五八九年にかけては、スペインはまだアルマダの体制建てなおしができていなかっただけに、英国側としては徹底粉砕のチャンスであったはずである。④ 当時英国内ではビュリータンが、ネーデルランドのゴイセンとともに、このような強い反スペイン感情をもっていた。しかし、当時のエリザベス朝政府が果してどこまで、このような反スペインに徹していたか、とくに戦争のはじまる以前にどのような国策を——国のすすむべき方向を——もっていたか。このような点について考察をすすめたいと思う。いったい、従来のわが国の英国史研究においては、当代英国の国力を過信し、毛織物工業の成長、中小生産者層の興隆からすべてを解釈していこうとする傾向があったのであるが、時のきびしい国際環境のなかに英国をおいた場合、そこにはいくつかの問題が見出されると考えるからである。⑤

まず考えなくてはならないのは、当時英国の海軍力についてである。英海軍はテューダー朝とくにヘンリー八世の宗教改革のころに建設されたといわれる。ギャレオン船の出現はこのころのこ

とであるが、これはルネサンスの他の科学技術とともに、このころイタリアからフランスを経て導入されたものであった。このときはいつてきたギャレオン船の特色は船体の長さが船幅の約三倍であったという点にある。ヘンリー八世は、この新しい船を導入することによって艦隊を革新したのであるが、これまで使われていたギャレイ船も補助艦として用いたのであり、入江や湾内ではその方がなお有効であったという。もちろんイタリア船をモデルとした英国船がなおさらに改良されていくのは、大西洋への商業的・海運的發展に呼応してのことであり、ここでもホーキンスやドレイクの果たした役割は見逃せない。⑥ ともあれ、一五八〇年代はじめにはこれらギャレオン船によって、海軍の活動範囲は急に広まり、大洋に立向かえるまでになった。全般的な形状ばかりでなく、その他の細部にわたる船舶の改良もやはり地中海から学んだとローリーは述べているが、これによって耐久力も増し、大航海が可能になったわけである。⑦

こうして、遠洋航海と遠征が活発になった一五七〇年代には、ようやく英国独自の改良もかなりすすみ、新型の戦艦が出現した。一五七五—一五七七年に建造された中型ギャレオン船リヴェンジ号は五〇〇トンであったが、ドレイクらの賞讃したものであり、アルマダ海戦の旗艦であった。八〇〇トンから一、〇〇〇トンの

大船は、英国ではあまり好まれなかった。ローリーは「六〇〇ト
ン船でも一、二〇〇トン船と同じくらいの砲を運びしかも二倍の
回転能力をもつ。スペイン人でさえ『大船は疲れやすい』*Grande
navio Grande fatiga*と述べている」と指摘している。

武装についても改良が加えられ、これまでであった砲にかわって
カルビアン銃がおおく用いられることになったが、これは爆発が
早くしかも長距離を飛ぶという利点があった。とくに黄銅より安
価な鉄製の砲は英国の独占物で、ローリーも高くそれを評価して
いる。パーレーもまた英国の鉄砲はヨーロッパ第一であると述べ
ている。

このような技術的革新があったとはいいながら、英海軍は、王
船が少なく商人船に多く頼らねばならなかった。アルマダを迎撃
した艦隊もその四分の三は商人船という有様であった。装備その
他の強襲力においても、商人船が中核であった。エリザベスはそ
の治世中に、その乏しい財政のなからつくった新船艦は二九隻
であった。しかもその大部分が一五七〇年以降のもので、金額に
してそれまであった王船の二倍が一〇年ほどの間に建造されたの
であった。それでもなお、アルマダを迎撃したのは王の中型、大
型ギャレオン船二五隻、商人船大小あわせて一五〇隻という状態
であったのである。もちろん商人船は機装費その他を自ら支弁し

たものである。当時の海上発展・探検航海がいかにも目覚ましいも
のであったにしても、海洋国家英国の海運力は、まだまだ貧弱な
ものであったし、しかもとくに民間の寄せ集めの商人船に多くを
依存するものであったのである。

スペイン王室は西インドからの銀でその海軍力を充実し、西イ
ンドに銀輸送船を派遣するかわら、英国海域に圧力をかけるだ
けの余裕があったが、英王室にはとてもそのようなゆとりはなか
った。英王室財政はきわめて貧弱なものであったといわねばなら
ない。

冷冽な計算と巧妙な手管で艱難なエリザベス朝英国の政界を動
かした秘書長官パーレーは、この日あることを予期して治世当初
より国家財政の安定に努力するとともに、戦争準備金を貯わえて
いた。一五八四年には英政府（王室）には約三〇万ポンドの蓄え
があった。しかし一五八五年の英西戦争の開始と、とくに八七年
から八八年のアルマダ侵寇に備えての出費で、一五八八年マイケ
ルマスには五万五千ポンドの残余しかなかった。年々の経常収入
約二〇万ポンドといわれた国庫収入のなかで、平時には約一五万
ポンドの支出で済んだものが、一五八七年には三六万七千ポンド、
一五八八年には四二万ポンドの国庫支出をみたのである。もちろ
ん、こうした非常事態のことであるから、議会協賛の経営外収入

が、一五八六—八八年の三年間に、年平均七万二千ポンド徴収されてきた。それでもこの割合でいくと五万五千ポンドの国庫準備金はあと八か月ほどしかもたないという有様であった。^①

さきにもたように、一五八九年はスペイン・アルマダの体制建てなおしに打撃を与えうる絶好のチャンスではあったが、一五八八年秋以後の英政府はこのような財政的危機に直面していたのであった。このような窮迫が八九年の遠征を躊躇させ、私企業に任せることになった理由だとみることができであろう。もちろんこの時の遠征隊長であったジョン・ノリスやドレイクが、ラ・コルニーヤのアルマダ残存勢力を撃つことよりも、リスボンやアゾレス諸島に赴いて、より華やかな戦果をあげること——私拿捕——に力点をおいたことも、この遠征が十分な成果をもたらさなかった大きい原因であっただろう。^②結局、この時の海上封鎖はスペイン西インド銀船隊の帰国をおくらせる効果をあげはしたが、これは致命的なものとはならず、翌夏スペイン西インド船隊はぶじ帰国し、アルマダは体制を建てなおしたのであった。そしてその後ふたたび英国遠征を試みる余裕をもち、戦争は長びくことになった。その意味で、政府の遠征隊に対する統率力のなさが非難されようが、^③それも私企業に遠征を委ねねばならなかった王室財政の苦しさによるものとみなすことができよう。

ところが、エリザベス朝の財政がアルマダ海戦前後ころから傾いていったのは、直接アルマダ侵寇に備えての本土ならびに海上防衛費だけによつたのではない。英政府はすでに一五八五年にネーデルランド叛乱を援助する補助隊約六、〇〇〇を送っているが、これだけで年一二万六千ポンドの負担であった。その後、八七年にはスロイスに、八八年にはベルゲン・オブ・ゾーメに、八九年にはオステンドに増援軍を派遣している。その上、八九年以後にはフランスのアンリー・ナヴァール公救援のため、軍資貸付金とウィロビー、エセックス兩軍とを送っている。^④

一五八五年のドレイクの西インド基地劫掠は私企業によつていた。八九年のリスボン遠征もまたそうであった。しかもその上アルマダを迎撃した英海軍もまた民間の商人船をその中軸とするものであった。こうしてみると、国家財政の問題もさることながら、英政府の少くとも中枢はもっぱら大陸に精力を集中し、海上遠征や海戦はあまり重視していなかったのではないかと思えてくるのである。そこでつきに大陸の事情をみていきたい。

① K. R. Andrews, *op. cit.*, pp. 126-27. 戦時中の拿捕収益はほぼスペインとの貿易に見合う額(輸入の約一割)をもち、遠洋航海術その他で後の発展に少なからぬ役割を果たした。

② G. Uvin, *Merchant Adventurers Company*, in R. H. Tawney, ed., *Studies in Economic History: The Collected Papers of George*

Urain p. 176. 保坂栄一「外国貿易の展開——イギリスにおける特種カントリーの盛衰を中心として」(『西洋経済史講座』) 二八一—二八二頁。

③ E. Edwards, *Life and Letters of Sir Walter Raleigh*, p. 245.

④ A. B. Wernham, *Queen Elizabeth and the Portugal Expedition of 1589*, E. H. R. vol. 66. 角山栄『イギリス絶対主義の構想』一三三—一三四頁参照。

⑤ 大塚久雄教授らのもちたてた英国資本主義成立過程の研究成果をそのシエートにのべてはわれわれも教えられるところが多かった。ただ、それでも中産の生産者層とは何かという実態が、より歴史具體的な角度から検討されなければならないのではなからかと思ふ。また、英国経済の成長が、島國から大帝國への発展のキキであるところ、この時点から、英國が大陸先進國を凌駕するに至ったか、きわめて判然としたところである。その上さらに英國経済の成長そのものが、國內の中小生産者層のトネルキーによるあらゆる純粹培養的な國內生産——當時にもつては毛織物工業——のきまづいたか、またはなは疑問である。川北稔「一七・八世紀英國の経済成長」(『西洋史学』六七号)・越智武臣「植民運動前後の英國経済」(『史料』一九六三年、四号、五号)参照。

⑥ J. A. Williamson, *Hatchings of Plymouth*, p. 231. J. Corbett, *Drybe and the Tudor Navy*, I, p. 24.

⑦ W. Raleigh, A Discourse of the Invention of Ships, in Raleigh's Works, vol. VIII, p. 323.

⑧ M. Openheim, *History of the Administration of the Royal Navy 1509-1660*, p. 123.

⑨ W. Raleigh, Observations concerning the Royal Navy, Raleigh's Works, p. 337.

⑩ Rowse, *op. cit.*, p. 252. あの決定的な大戦がわずかばかりの技術の差で勝敗が決ったと連断できないのはどうもなないが、それにしてもこの火砲の改良とこう点は見逃せない。アルマダ艦隊は敵船に接触して攻撃を加える旧来の方式を採ったのに対し、英國船は遠くから敵を迫るところができたからである。ノリイ二世も「敵の目的は火砲の有利を利用して長距離で闘うことにあるだろう。だがわが方の目的は至近距離に迫って敵を擧げようである」(M. Lewis in the *Manner's Mirror*, No. 29, p. 12) と語らう。Rowse, *op. cit.*, p. 275.

⑪ Corbett, *op. cit.*, p. 386.

⑫ Ralph Davies, *The Rise of the English Shipping Industry in the 17th and the 18th Centuries*, 1962, p. 2f.

⑬ F. C. Dietz, *English Public Finance 1558-1641*, 1962, p. 48.

⑭ R. B. Wernham, *Queen Elizabeth and the Portugal Expedition of 1589*, E. H. R. 1951, vol. 66, pp. 1-2.; *od.*, Elizabethan War Aims and Strategy, in *Elizabethan Government and Society: Essays Presented to Sir John Neale*, 1961, p. 356.; F. C. Dietz, *Eschoquer in Elizabeth's Reign*, pp. 100-101.

⑮ Wernham, *Portugal Expedition*, pp. 2-4.

⑯ 海軍長官(ローエ、ナジ)のメンク(當時海軍副司令官)のやり方はすべて攻撃的、指令違反を憤るべし。Corbett *op. cit.*, vol. II, p. 296.

⑰ J. E. Neale, *Elizabeth and the Netherland 1586-7*, E. H. R. 1930, p. 373-396.

三 英国政府の動向

宗教戦争の時代という言葉に集約されているように、一六世紀の国際政局は宗教的紛争と離れがたく結びついていた。その意味で、当時の英国も、もちろん大陸ときわめて密接な宗教的ないし政治的關係をもっていた。国内でも、カトリック、親スペインのメアリー・テューダーの支配のあとをうけて、メアリー・スチュアート擁立の策謀等々の逸話に事欠かなかった。それとともにエリザベス朝宮廷内にも、一五七〇年ころから、ウォルシンガム卿、レスター伯、そして後にはエセックス伯といった積極交戦派ともいべき一派がしだいに勢力を伸ばし、セシル・パリーーら政府主流の慎重派に少なからぬ影響を与えることになる。アルマダ戦争に顕現される英国の大陸政策はもちろんこのような国内の動きのあらわれとみることができであろう。だが国内カトリック派の動きは大陸諸国と緊密に結びついていたのであるから、これに対処する政府としても大陸政治の動きを無視することはできなかつたわけである。カトリックに対抗してしかもプロテスタントに徹しきらなかつた政府の行き方のなかには、宗教紛争の間に醸成されていた冷徹な現実政治の利害関心をうかがい知ることができるのである。

このように内治と離れがたく結びついていた外交問題のなかで、ネーデルランドの反スペイン闘争はとくに英国にとって重要であった。カトリック・スペインの専制支配に対するネーデルランドの反抗は、それ自体きわめて複雑な内容をもつものであるが、英国にとつてはまず、ハプスブルク家の世界支配に対する関係から政治的にも見逃せないものであった。海上への進出がすでにスペインに対する挑戦であったにしても、これにきわめて消極的な態度しか示さなかつた政府首脳が、なぜに火中の栗を拾うような形で、ネーデルランド増援軍を派遣したか。しかも乏しい国家財政をはたいてまでそうしたのか。反カトリックという宗教的情熱、専制に対して闘う民衆の救済、それに宮廷内の主戦派の意向、こうしたものが慎重なエリザベス朝政府主流を動かしたのであろうか。さらにまたネーデルランド地方が重要な毛織物輸出市場であったから、この地の安泰をねがったからであろうか。こうした点について以下みていきたいと思う。

まず最後の点についてだけいえば、なるほどイングランド銀行にも比すべき役割を荷なつたといわれるマーチャント・アドヴェンチャラーズが、アントワープ市場を失うことは英政府としても見過せないところであつたに違いない。しかし、アントワープのロンドン商人はすでにアルバ公の到来(一五六七)以前からエム

デンへさらに後にはハンブルクへとその指定市場を移しかえていたのだし、毛織物輸出不振はすでに一五五二年ころからの現象であったのだから、とくにネーデルランドの政治的危機によつたものではなく、このことだけで、慎重な英政府が独立戦争に介入したとは思えないのである。

はじめにも記したように、エリザベス治世当初においては、スペインよりもフランスが仇敵であった。女王自身も「英国はフランス勢力に拮抗しうる強力なスペインを必要としている」と信じていた。フランスとハプスブルク家というこの二大強^{レウイフェッソ} 国の間にあつて、いかに身を処していくか——これこそいくたびとなく試練にたたされたエリザベス朝政府の最重要課題であつたのである。

大陸羊毛市場の拠点カレーがフランスに奪われたのは、そう古いことではない^④。しかもフランス海軍の基地ブレストがブルターニエの西端にあつたことは、風向きから考えても英国の生命線英海峡に対する脅威であつた。このようにフランスの戦略的位置がスペインよりも恐るべきものであつたことが、少くとも一五六七年までの英国外交を親スペイン的なものにしてきた理由であつた^⑤。

ところが、一五六七年にはアルバ公のスペイン精銳がブルニュセルに入り、ネーデルランドに対する軍事的支配が強化されると、英国としてもこれを傍観しているわけにはいかななくなつた。英国

にとつてネーデルランドは毛織物輸出の中心地であつたばかりでなく、海岸地帯がスペイン軍に握られることは、国防の点からも容認できないことであつたからである。一方ではフランスの脅威と他方ではスペインの進出という危険に曝された英政府のつた対策が、一五六八年からの非公式のアルバ船襲撃とネーデルランドへの義勇軍の派遣であり、ユグノーとの密約であつた^⑥。そしてこの局面をさらに変えたのが、ユグノー戦争下のフランスで旧教派（ギーズ家ら）がスペインと結んだことであつた^⑥。しかもフランス・カトリック同盟の地盤が北部と東部諸州におよんでいたことは、ネーデルランドの危機とともに、英国の無視しえないところであつた。

すでに、非公式の形でネーデルランドには、ハンフリー・ギルバートらの軍が送られていたが、一五八五年にエリザベスが公然とレスター伯の率いる精兵六、〇〇〇をこの地に派遣したのは、こうした事情の下においてであつた。これらの軍の三分の二以上が海岸地帯のベルゲン、オスランド、フリッティングゲン、ブリルの守備におかれたことは、ドーヴァー海峡の守備がいかに重視されていたかを物語るものであつた^⑦。

しかし、ネーデルランドに対する英政府の態度はきわめて微妙なものであつた。ありていにいえば、スペインの強力な支配がこ

の地に及ぶことはまず防がねばならないとしても、フランス勢力（カトリックであれ、ユグノーであれ）がここに入ることも、やはり英国にとっては警戒せねばならぬことであつた。そのためには、ネーデルランドがスペインとの対抗上フランスの援助をうけることもまた防がねばならなかつたのである。それゆえ、英政府の政策は、カトリック同盟に敵対するものであつたとはいへ、ネーデルランド独立援助も、フランス・ユグノーに対する支援も、オランダ愛国者や英国内のピューリタンを喜ばせるほど徹底したものではなかつたし、主戦派のように旗色を鮮明にするものでもなかつたのである。

英国国への外国軍隊の侵入を別とすれば、「スペイン軍（またはその同盟軍）が、これら諸港（ブルターニュや英国海峡沿いの諸港）かネーデルランド地方の諸港かを占領しなければ、わが国の危険はさほど大きくはない」と当時大陸の事情に明るい一軍人は述べている。英国の大陸への進出、プロテスタントへの援助は、何よりもまずこうした危険を避けるためのものであつたし、それ以上のことを望んだものではなかつたのである。レスター伯がネーデルランド進駐中に連合総督を引受けたとき、エリザベスはこれに好感をよせなかつたが、これはもちろん当時の英国にそんなゆとりがなかつたことにもよるが、同時に反カトリック同盟領を

つくる意向、この地に宗主権をもつなどという意向などまったくなかつたことによつてゐる。当代政府のまず確立しなければならなかつたのは国家の安寧であつたわけであり、そこから割りだしての外交であり交戦であつたのである。したがつてまた、八五年戦争の開始までは、いな戦時中においてさえ、積極的に海外遠征を指示せず、むだな軋轢を避けようとしたのも、このゆえであるともみることが出来る。エリザベス女王晩年の国家財政の危機は大遠征費の重荷にはじまるが、これは^⑩国家の独立にとつて必要な最低限度の防衛費であつたとみなすことができるのである。

フェリペ二世の侵略意図については、ここで十分あきらかにすることができなかつたが、スペインとしてもドレイクらの西インド襲撃、アズレス沖での拿捕による衝撃もさることながら、ネーデルランド叛乱の鎮定を英国が妨害したことに對する不信が、英国遠征を決意させるより大きい動因であつたと思う。

いうまでもなくスペインとしてはネーデルランド問題は内政問題であり、英国のこれへの介入はいわば内政干渉であつたとみることが出来るからである。だからこそ、スペイン最強のアルバの精兵がこの地に派遣されていたのである。そして英国としてはこの点を國の安全を脅かすものとして重視しないでいられたかつての点である。

これまでのアルマダ戦争観は、ともすれば海での戦闘——戦争の攻撃的側面を強調しすぎるきらいがあったのではないか。この戦争が、英国をヨーロッパ政治のわくのなかから一歩抜けたさせ、大洋と帝国への道を歩ませるものになったのは確かであろう。しかしだからといって、当時の英国の力を過信してはならない。アルマダ戦争は、少くとも英政府にとっては、海洋と海上帝国の支配をめぐる争いではなかった。少なくともそれが第一義的要素ではなかったのである。この戦争中に西インド、アゾレス諸島海域などで、英船によるスペイン銀船団に対する激しい攻撃が加えられたのは、スペイン護送船団の力が脆弱であったから可能であったことであって、けっして英海軍力が強かった証拠にはならないのである。この戦争はやはりヨーロッパ戦争であり、英国にとって重要だったことは、国家の安寧であり、大陸の巨人国からの独立であったのである。

- ① マーチャント・アドヴェンチャラズが、指定市場をアントワープからエムデンにはじめて移したのは一五六四年のこと、これは毛織物輸出不振を打開せんとする商人の意図によつた。T. S. Willan, *Interlopers and the Staple, Studies in Elizabethan Foreign Trade*, 1959, pp. 51-52.

② 一三九頁註②参照。

③ 即位当初からのメアリー・スチュアート派の動きによつてゐる。メアリーはスコットランド王ジェームズ四世とメアリー・ギーズの子であ

つたため、フランス・スコットランド同盟の盟主として、イングランド北部境界のカトリック貴族を動かした。とくに五九年から六〇年にかけてはギーズ・フランスの脅威は大きかった。Williamson, *Tudor Age*, pp. 261-265. エリザベスやセシル・バレーラーの世代が、このした環境の下で育つたことが後に至ってもスペインとの敵対をあくまで回避しようとした彼らの大陸政策に影響しているように思われる。それからあらぬか、エリザベスは一五八五年に至つてもなお、スペインとの友好を維持したいと公式には言明していた。一六三頁註⑥参照。

④ 百年戦争後メアリー女王時代までのこされた唯一の大陸の拠点カンブライが失われるのは一五八八年シャトー・キャンブレ Chateaucambrai 条約によつて。Williamson, *op. cit.*, p. 216.

⑤ Wernham, *War Aims*, p. 341; K. R. Andrews, *op. cit.*, p. 7.

⑥ カトリック同盟の結成は一五七六年のことである。Williamson, *op. cit.*, p. 296; K. R. Andrews, p. 8.

⑦ Neale, *op. cit.*, p. 374.

⑧ 一五九〇年一月のウイリアムズ(Sir Roger Williams)の言葉。Wernham, *op. cit.*, p. 355. なおウイリアムズは早くから大陸戦線に従軍した経験をもつ当時英国陸軍の有力な司令官であつた。Sir Roger Williams, *The Action of the Low Countries*, 1618. Rowse, *op. cit.*, pp. 340-341.

⑨ Wernham, *op. cit.*, p. 346.

⑩ Dietz, *op. cit.*, p. 59 f.

⑪ Andrews, *op. cit.*, pp. 160-162.

むすび

戦いは長びいた。客高だとさえいわれたエリザベス王室の財政

も日増しに窮迫をつけていった。九三年議會以後、新税協賛は思
うにまかせなくなっていた。そして一六〇一年の最終議會は、
国王大権に対する挑戦をはっきりと提示した。^①大陸での戦乱がつ
づくうちに、アントワープ市場閉鎖以後混乱をつづけていたマー
チャント・アドヴェンチャラーズの指定市場はたびたび変った。

そして指定市場の不安定のために、もぐり商人や規約違反組合商
人がきわめて活動しやすくなった。^②「独占論争」で知られる一六
〇四年のジェームズ一世第一議會が開かれたのは、スペインとの
講和締結と相前後してであった。^③こうした次世代との関連につい
ての詳論は別に試みなければならぬが、この時点においては、
英国政府はまだ大陸との政治問題に忙殺され蹂躪される有様であ
ったということである。

しかしその同じ時期に、民間では貿易商人やジェントリが盛
んに海洋に、新天地に躍動していたことを見落としてはならない
であろう。英国の大をなざしめたのは、このような民間人の海上
への発刺たる意欲によったものであり、イベリア半島の先進国に
対する勝利が不明確なものであったにもせよ、その成果を利用し
たのは彼らであった。ただ、こういったからといって、これがた
だちに反政府的態度をとったといわれる、いわゆる「中産的生産
者層」の成長を促したのだというのではない。むしろ、この二〇

年の戦いのなかで、獅子のわけ前にあずかり、次代の政財界を動
かしたのはロンドン商人であり、それも貴族とならぶほどの大商
人だったのである。

「ロンドンにおいては、アントワープの没落（一五八五年）と
政府自身の財政的必要性かられて、ほとんど近代的技术——投機、
先物取引、輸取引など——をもつ金融市場が発達した。未来は、
一六世紀末の商業の発展とともに富と権力を握った階級の手にな
かにあった」（傍点引用者）とトニーも述べている。^④実際この戦
争の間に、国王はしばしばロンドン市から融資をうけた。王領地
の売却もまたきわめて盛んであった。^⑤かてて加えて、戦時中の国
家公認の私拿捕、それも正常取引を補う成算のとれた私拿捕企業
もまた、この戦争のもたらした産物であった。ロンドンの大商人
達は、これらのいずれにも関与し、九〇年代中にその立場をより
強固なものにしていった。^⑥宮廷を中心とした首都の比重の高まり
は、絶対王政の随伴現象のようにいわれがちであるが、私拿捕の
もたらした砂糖、香料などの高級品の取引に、多額の資金を要し
た遠征隊への貸付けや投資に、王室その他への融資に、王領地の
購入に活躍したからこそ、ロンドン商人と「シティー」は全国を
牛耳るまでに成長することができたのである。ロンドンが地方港
（都市）をおさえていく過程が、毛織物輸出不振の時代中にも進

行していったことに、われわれは注目したのである。

しかも「シティー」は何よりも冷冽な商取引の場であり、非人格的な打算のみの支配する当時の最も先進的なところであった。

反スペイン感情の昂まりとともに強化されたビュリタニズムのエネルギーもまたこうしたなかで育まれた個人主義の成長と無縁ではなかったはずである。二〇年にわたるこの戦争のもたらした英国朝野に対する影響はもとよりこれに尽きるものではない。社会的、経済的変動のはげしかった一六世紀末の諸問題をここに一括することはできない。とくに英西戦争の途中から加わったアイerland戦争の問題にここでは触れることができなかった。だがしかし、この二〇年のより深い総合的な開明なくしては、テューダーとステュアートとの時代相の差異もつかみえないであろうし、数一〇年後に展開されるビュリタン革命に対する投視図も完成しえないであろうことを、付言しておきたい。

① 紀藤信義『イギリス初期独占の研究』、昭三九、二六頁。

② もぐり商人が史料にあらわれてくる最初の例は一五九〇年代のことであった。Willan, *op. cit.*, p. 35.

③ E. Lipson, *The Economic History of England*, vol. II, p. 243; W. H. Price, *The English Patent of Monopoly*, p. 103; 紀藤前掲書、四四—四六頁。

④ R・H・トーニー『宗教と資本主義の興隆』（出口、越智訳）、下巻、六六頁。

⑤ Dietz, *op. cit.*, pp. 63-70.

⑥⑦ ウェールズから出て、この時代にタワー・ストリートに豪壮な居宅を構えた大商人に成長したトーマス・ミドルトンとその兄弟は、その代表的な例である。——A. H. Dodd, Mr. Myddleton: the Merchant of Tower Street in Elizabethan Gov. and Soc., pp. 249-281.

〔付記〕海戦の日付けは当時英国の曆によったが、これはグレゴリー曆ではない。英国はまだグレゴリー曆を採用していなかった。七月二一日と記したものはスペイン（グレゴリー曆）では七月三一日にあたる。——C. Mattingly, *The Defeat of the Spanish Armada*, p. 19.

（京都大学研修員・京都教育大附属高教諭）

the economic base theory is rather useful to explain the urban population changes.

The Armada and the Attitude of the English Government

by

Minoru Asada

In our country, so many researches have been made on the sixteenth century English history—the growth of rural industry, the rise of the gentry and many other aspects of the Elizabethan reign. But there has been no attempt to investigate the War of the Armada. The war was waged in the complicated situation of the international politics of the age. England emerged a great power as the result of this war, but the historical studies hitherto have thrown little light on this side of the problem. It is a matter of course that England in the middle ages was a part of Europe. And even after that, she has had close relationships with the continental world. In this article, I intend to get a portrait of the contemporary England conditioned by the time of sixteenth century Europe through the analysis of the attitude of the English Government toward the Armada.